

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第6回 パラオでの戦争体験(後編)

おかやま みな こ
岡山 美奈子さん 昭和14年生まれ

(前編は12月15日号で掲載)

日本の委任統治領であったパラオで生活していた私たち家族は、本土への帰還命令に従い船に向かいましたが、幼い子どもたちが泣き止まず、乗ることができませんでした。自宅に戻った私たちは、運良く軍のトラックに乗せてもらえることになり、荷台のロープにつかまり揺られていました。

ジャングルの木々に隠れるように暮らす日々

着いた先は、ジャングルの木々が茂る洞窟のような場所。私たちはそこで、何組かの家族と一緒に暮らすことになり、母は、畑で軍の食糧となるサツマイモやタロイモを作ることになりました。農作業に出かけていく母は、敵機から見つかりにくくするため、葉の茂った木の枝を束にしてもんぺのひもで背中にしかりと縛り付けていて、その後ろ姿はまるで木が立っているかのような様子でした。

ある日のこと、母は鋏を振り上げた瞬間、遠くに光を見たそうです。とっさに身を伏せたのですが、少し離れた所にいた3人の仲間(しょうい)は焼夷弾に当たって死んでいました。家にたどり着いた母は「母ちゃん」と飛びついてくる子どもたちの姿を見て初めて安堵したそうです。

当時10歳になっていた兄は、軍が管理する農場の伝令を命じられ、ジャングルに点在する各部隊を回っていました。少年に伝令をさせるのは、米軍戦闘機による上空からの監視を避けるための手段であったようです。伝令に行く途中に敵機に見つかり、ほんの10センチメートルのとこ



里帰りした時に岡山さんが撮影したパラオのジャングル

ろに銃弾が飛んできてとても怖かったと話していました。米軍機が低空で飛行していたため、見上げた先に米兵の笑っている顔が見えたそうです。また、兄は一度、伝令内容を間違えたということで、責任者の軍曹が怒って拳銃を向けてきたことがあるとも言っていました。

母が仕事で不在のため、兄は伝令に出かける時、ジャングルの木々の間に私たち幼いきょうだいを一列に座らせ「いいか、兄ちゃんが帰ってくるまでここを動くな。動くと死ぬぞ」と言い聞かせました。うっそうと生い茂る木々が視界を遮ってくれますが、枝の間からは敵機が上空を旋回しているのが見えました。遠くではドカーンと爆弾の音。近くではバリバリバリと焼夷弾の音。空からは機関銃。母や兄が無事に帰ってくるという保証もなく、私たち幼いきょうだいは恐怖と心細さで口も体も固まっていました。

そして、ついに1945年8月15日、日本が戦争に負けると、母と兄は初めて「明日からどうしよう」と未来の心配をしたそうです。

軍に召集されていた父は、敵機からの機関銃による攻撃で、左手の人差し指を失い、おなかをえぐられる大けがを負いましたが、1946年1月に私たちの元に戻って来ました。

戦争で受けた恐怖や苦しみは、戦後80年近くの歳月が流れても私の心の中からいまだに消えることはありません。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年1月15日号 No.1523



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は12月27日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

何もない殺風景な様子を「寒々しい」というように、「寒い」と「寂しい」には近い意味があるように感じます。さて、4ページのNARITA クリスマスマルシェでは、実行委員会や模擬店のスタッフが大きな声と笑顔でイベントを盛り上げ、多くの来場者が楽しんでいる姿を目にしました。シャッターを押す指がかじかむような寒い日でしたが、寂しさとは対照的な会場のにぎやかな様子を、とても温かい気持ちになりました。

リサイクル適性(㊞)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。